



小泉八雲・セツと 出会う松江

2025年秋からNHKで放送の連続テレビ小説「ばけげ、そげ、あげ」。主人公のモデルは明治時代の文豪小泉八雲の妻・小泉セツです。八雲がセツと出会い、古き良き日本の面影が残るまち、風景、そして人々に魅了された松江の地にあなたも訪れてみませんか。



小泉八雲
(ラフカディオ・ハーン)

1850年にギリシャで生まれ、アイルランドで育つ。19歳の時にアメリカに渡り新聞記者として活躍。1890年、39歳の時に来日。同年8月に、英語教師として松江に赴任。松江の暮らしの中で出会った「古き良き日本」、セツから聞いた不思議な話を元に多くの著作を著した。公平で愛のある「オープン・マインド」なまなざしで人間や異界、自然をみつめたことでも知られる。



小泉セツ

1868年に松江藩の家臣小泉家に生まれる。23歳の時に松江の英語教師として赴任した八雲と夫婦となり、三男一女をもうける。幼いころから物語が好きで、地元で伝わる昔話や伝説などを八雲に語り聞かせた。八雲の再話文学創作における最大の功労者。八雲にとって、「世界で一番よきママさん」。



小泉八雲とセツが出会ったまち

松江旅のすゝめ

小泉八雲曾孫・小泉凡さん監修により、2008年からスタートした小泉八雲の怪談ゆかりの地を巡る人気のツアー。松江といえば、小泉八雲の怪談！日没後、八雲が再話した怪談の舞台を、暗闇の中で五感を研ぎすまして巡ります。地元の語り部が心を込めて、怪談の世界にご案内します。ゴーストツアーで怪談の中に秘められた真理を探してみましょう。

主 催／一般社団法人 松江観光協会
監 修／小泉八雲記念館 館長 小泉凡

ゴーストツアー
PVはこちら！

※開催時期等の詳細については、
松江観光協会HPをご確認ください。



カラコロ工房
KARAKORO PLAZA

カラダもココロも喜ぶ
幸せな時間と空間を

文化財に指定され、令和6年10月には大規模改修工事を経て、新しい魅力を備えた複合施設に生まれ変わりました。

山陰の食材を使ったグルメや、松江を中心とした地元のお土産物、松江ならではの文化体験が楽しめるスポットです。「食べる」「買う」「体験する」を通して、松江の魅力をたっぷり感じられます。

また、カラコロ工房から京橋川を挟んだ先にはカラコロ広場があり、小泉八雲の後ろ姿のレリーフが多くの観光客のフォトスポットになっています。

カラコロ工房
〒690-0887
島根県松江市殿町43番地
TEL.0852-20-7000
FAX.0852-20-7070

カラコロ広場
〒690-0843
島根県松江市末次本町110

WEB QRコード Instagram QRコード

JR西日本
273系特急やくも
詳しくはこちら▶

普通車指定席
座席間隔は新幹線と同じゆったり感。座席の肘掛け部分にはコンセントも！

セミコンパートメント
フラットにして足を伸ばせるシートを配置。普通車指定席料金でご利用可能。
2名用・4名用の2種類

おトクな旅行プラン！おトクな周遊バス！
旅は、tabiwa

tabiwa by WESTERはこだわりの企画やおトクな旅行プラン、鉄道・バスなどが乗り放題の周遊バスや観光・グルメのチケット購入など旅がもっと素敵になるワクワクがつまったJR西日本のサービスです。

自由周遊区間のJR(普通列車普通車自由席)や指定のバス、観光施設の入場券がセットになったおトクな周遊バスです。

小泉八雲・セツに
まつわる場所を巡るなら
**松江・出雲tabiwa
ぐるりんパスが
おトク！**

購入はこちら
購入には
WESTER会員登録
(無料)が必要です。

アクセス情報
※乗り換え時間を含みます

■東京から【サンライズ出雲】約11時間40分
【新幹線・特急やくも】約6時間15分

■名古屋から【新幹線・特急やくも】約4時間35分
■新大阪から【新幹線・特急やくも】約3時間40分

小泉八雲とセツが出会ったまち
松江旅のすゝめ

それは、西にある。
DISCOVER WEST

発行: DISCOVER WEST 連携協議会
協力: 小泉八雲記念館、松江市



273系特急やくもと
一緒に。(安全に配慮
して撮影しています)

この秋から、NHKで連続テレビ小説「ばけばけ」がスタートします。主人公・松野トキは小泉八雲（ラファディオ・ハーン）の妻、小泉セツがモデルです。私が子どものころ、東京・世田谷の自宅では曾祖母セツ愛用の姿見を家族で使っており、それにサッカーボールでひびを入れてしまった失態はいまも忘れることはありません。

松江藩士の娘小泉セツは1868（慶応4）年2月4日生まれ。節分の頃生まれたので「セツ」と命名されました。セツは1891（明治24）年2月ごろ、当時、島根県尋常中学校で英語教師をしていた八雲のもとで、住み込みで働くようになります。八雲はセツに語り部の才を見出し、ふたりは結ばれ、1896（明治29）年に正式に結婚。八雲の代表作『怪談』も、ネタ探しから、語り、推敲までセツが重要な役割を担いました。

八雲とセツには、極貧、結婚生活の破綻というカタストロフィ（惨事）体験、さらにオープン・マインドと物語好きという共通点がありました。響きあう境涯だったからこそ、13年8か月の夫婦生活が、ともに人生のハイライトになったのでしょう。

ふたりが出会った松江への旅は、第23回「日本鉄道大賞」を受賞したブロンズカラーの最新鋭車両の特急「やくも」の旅が魅力的です。私は学生時代の1980年代から100回近く「やくも」号を利用してきましたが、このたびの変貌ぶりには感動。普通車のシートピッチの広さ、セミコンパートメントシートの遊び心、車内チャイムのヒゲダン、振り子電車独特の揺れの改善など、そんな魅力が満載です。

ところで「特急やくも」も「小泉八雲」も、その名の由来は『古事記』です。須佐之男命（すさのおのみこと）がヤマタノオロチから櫛名田比賣（くしなだひめ）を救い、出雲の須賀（すが）の地で詠んだ日本初の和歌「八雲立つ出雲・こに由来します。八雲はこの和歌を来日前にフランス語の本で知り、さらに英訳『古事記』を精読して、出雲に深い関心を寄せたのです。

「やくも」号も「八雲」夫妻も、みなさまを怪談や神話のふるさとへ誘います。

小泉八雲記念館館長
小泉 凡

1961年東京都生まれ。1987年に松江へ赴任し、妖怪、怪談を文化資源として地域に生かす文化創造活動や、小泉八雲の「オープンマインド」を社会に生かすプロジェクトを世界のゆかりの地で展開する。焼津小泉八雲記念館名誉館長・島根県立大学短期大学部名誉教授。主著に『怪談四代記―八雲のいたずら』『小泉八雲と妖怪』など。

「やくも」と「八雲」に誘われて
「ばけばけ」の舞台へ



こいずみやくもきゆうきよ 小泉八雲旧居

八雲とセツが暮らした武家屋敷で、6月から5か月間をここで過ごした。2人が住んだ当時の風情を残しており、特に八雲はこの家の庭園を大変好んだ。国指定文化財。

■松江市奥谷町322
■0852-21-2147



まつえじょう 松江城

国指定された五城のうちの一つ。八雲は、天守を「大きな塔(バゴダ)」と呼び、「あたかも、大きな怪物を寄せ集めて造った、建物の竜のようだ」と評した。

■松江市殿町1-5
■0852-21-4030



こもりいなりじんじや 兎守稲荷神社

八雲はこの神社にある願掛けの絵や文に興味を持ち、よく訪れた。現在も子育ての神社として市民から信仰を集める。

■松江市石橋町74
■0852-21-9337

こいずみやくも きねんかん 記念館

小泉八雲の直筆原稿や初版本、愛用の机などの遺愛品約150点が展示されている。企画展では、小泉セツが愛用した姿見や化粧道具など貴重な資料の展示も。

■松江市奥谷町322
■0852-21-2147



3 城山稲荷神社



じょうざんいなりじんじや 城山稲荷神社

八雲はこの神社を好み、しばしば訪れた。境内の2,000以上の石の狐に興味を持ち、特に気に入った狐もあった。

■松江市殿町477
■0852-21-1389

5 普門院



ふもんいん 普門院

ある侍が、禁忌を破って「杜若の謡い」を謡ったために、女の幽霊に我が子を殺されたという怪談「小豆磨ぎ橋」の舞台。境内には不昧公ゆかりの茶室「観月庵」も。

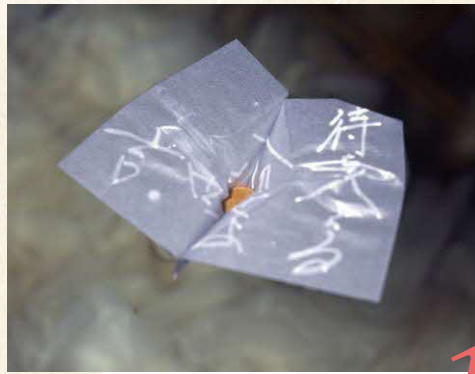
■松江市北田町27
■0852-21-1095



小泉八雲・セツの
面影を訪ねて

小泉八雲は、紀行文の最高傑作とも言われる『知られぬ日本の面影』(1894年)において、松江のまちの営みや人々の暮らしを五感で観察し、世界に向けてその素晴らしさを文章で伝えました。本作で紹介された数々の場所や妻セツの思い出の場所をご紹介します。

※一部地図の表記がない場所がございます。あらかじめご了承ください。



やえがきじんじや
八重垣神社

縁結びで名高い神社。「鏡の池」は小銭を紙に浮かべ、沈む速さと場所で良縁を占うことで知られる。セツが娘時代に占ったところ、ゆっくり時間をかけて遠くに沈んだという。

■松江市佐草町227 ■0852-21-1148

13



とうこうじ
洞光寺

月照寺とともに八雲が気に入った寺。この寺の鐘の音は『知られぬ日本の面影』の冒頭に登場する。

■松江市新町832
■0852-21-5807

14



だけさん
嵩山

松江を代表する展望スポット。嵩山にまつわる伝説「あみだ寺のびく尼」は、セツの祖母の時代に語られた説話を、八雲が書き上げたもの。

16



かか くけど
加賀の潜戸

海に面した二つの自然の洞窟。八雲は死んだ子どもの霊が石を積みに来る旧潜戸を訪ね、この国には水の世界と死者の世界の神秘的なつながりがあることを感じた。

■松江市島根町加賀6120-14
■0852-85-9111(加賀潜戸遊覧船)

17



みほのせき
美保関

海が好きな八雲は、伝承と神事が息づくこの港町を好み、旅館に逗留し、海水浴を楽しんだ。

だいおうじ
大雄寺

身ごもったまま葬られた女が墓中で子を産み育てる怪談「飴を買う女」の舞台。八雲は、母の「愛は死よりも強し」と話の終わりを結んでいる。

■松江市中原町234 ■0852-22-1468



8



だいち やど
第一の宿・富田旅館跡

八雲は松江大橋を渡る下駄の音、水面に映る霞んだ風景など松江の第一日目の印象を『知られぬ日本の面影』に記している。

■松江市末次本町40(大橋館)

りゅうしょうじ
龍昌寺

寺町の散策を好んだ八雲は、彫刻家・荒川亀斎が作った地蔵に目をとめ、大変気に入った。この寺は十六羅鑑像でも有名。

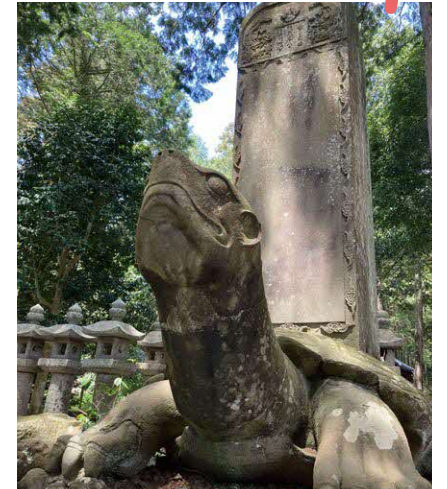
■松江市寺町136 ■0852-21-6256



げっしょうじ
月照寺

セツによると、八雲が一番好きだった寺。境内にいる大亀の石像が夜々隣の蓮池に飛び込み市中を暴れまわったという伝説の舞台。

■松江市外中原町179
■0852-21-6056



7

9



しまねけん
島根県尋常中学校/県庁跡地

八雲が英語教師として教鞭をとった島根県尋常中学校は、今の県警察本部庁舎の所に、彼を招聘した島根県庁はその真向かいにあった。

■松江市殿町8-1
(県警察本部)

11

げんすけこうえん げんすけばしらきねんひ
源助公園/源助柱記念碑



松江大橋をかける時、難工事のために源助という男を人柱にした不思議な伝説を、『知られぬ日本の面影』の中で紹介している。橋の真ん中の橋杭は「源助柱」として後の世にも伝えられた。